

[研究ノート]

徳育の現状と徳論の課題

—手がかりとしての「忍耐」—

石井雅之（倫理文化研究センター特任研究員）

はじめに

「忍耐」は、諸徳目の関係性ないし秩序の理解、換言すれば、諸徳目の総合的理解ひいては人間観の試金石となるものであると同時に、異文化からの日本人観の構成要素として注目されるべきものと考えられる。その「忍耐」に関して筆者は以前、道德教育及びその関連領域における「忍耐」の扱いの現状と「忍耐」概念による課題設定のもちうる意義について少しばかり調査・考察し、「徳育における『忍耐』の位置づけについて—『生きる力』及び『レジリエンス』概念との関係と問題点—」と題して公刊したことがあるが、平成 27（2015）年 3 月に小学校及び中学校の学習指導要領が一部改正され、同年 7 月までにその解説編が公にされたのを機に、本誌に場を得て再論・展開することにした。

道德に関しては、今回の一部改正によってその位置づけが「特別の教科」とされることになったことは周知の通りである。その「内容」に関しては、この改正によって変更された点もあれば変更されなかった点もあるが、本稿で筆者が取りあげる「忍耐」の扱いに関しては画期的な変更はなく、むしろ改正前の傾向を徹底したものとみえる。「忍耐」という語が一度も用いられないことは改正前後に共通する紛れもない事実である。平成 27（2015）年 7 月の「中学校学習指導要領解説」の改訂では、改訂前には一部に用いられていた「忍耐」の語が一掃された。

道德教育における「忍耐」の扱い、ひいては「忍耐」に密接に関係する諸徳目の扱いはこれでよいのか。さらには、高等学校公民科「倫理」との接続についてはどう考えればよいのか。本稿では、この問いに関して熟考するための若干の材料を提出しようと思う。道德教育の「内容」説明に盛り込まれる徳目にかかわる問題は、「忍耐」以外の徳目に関しても提起されうるが、本稿では、さしあたり「忍耐」に着目して、現状に対して 1 つの問題提起を試みたいと思う。